

飛騨圏域で看護職を志向する高校生の地元愛を育む

高等学校での進路指導

— 高等学校で進路指導を担当する教員の聞き取り調査から —

小野 悟（岐阜協立大学看護学部）
遠渡 絹代（岐阜協立大学看護学部）
臼田 成之（岐阜協立大学看護学部）
神谷 真有美（岐阜協立大学看護学部）
松原 薫（岐阜協立大学看護学部）
奥村 太志（岐阜協立大学看護学部）

キーワード：飛騨圏域、看護、高校生、地元愛、進路指導

I. はじめに

我が国では少子高齢化により、医療・福祉分野において高齢者を支える人材が必要に対して供給が伴わない深刻な人手不足に陥っており、2040年には就業者数が96万人不足すると見込まれている¹⁾。岐阜県内では、特に飛騨圏域で2025年までに15～64歳までの生産年齢人口が13.9%減少し、少ない働き手で多くの高齢者を支えるという人口構造が推定されている²⁾。飛騨圏域の老年人口割合は、2023年に36.9%（全国比7.8%増）を占め、2045年の推計では47.0%まで上昇し、看護職員の高齢化も進むと予測されている。飛騨圏域は県全体の面積約40%を占める豪雪地帯を含む広大な山間部に位置するが、看護職員は微増傾向でありながらも一人あたりの受持ち面積は広く、活動効率や移動の負担等の課題が多い。以上の地域特性から、飛騨圏域は医療・福祉分野の担い手自身が高齢化かつ減少していく状況の中で、広範囲に点在する多くの高齢者を支える逼迫した事態が推察され、若手看護師の確保は喫緊の重要課題である。

また、飛騨圏域の看護師養成校は、専門学校が2校のみであり、四年制の看護大学に修学するには県南方の圏域か他県に転出する必要がある。コメディカル分野においても大学進学率が高まる中、飛騨圏域からの人口流出を防ぎ、次世代を担う人材の確保と養成のための方策が必要である。このような背景の中、高校生の進路に影響を与える存在としては「親（保護者）」が63.7%と最も高く、次いで「学校の先生」が30.1%を占めている³⁾。この高等学校の教員は、「地域を支える意識を持ちながら生徒の要望を実現するための教育実践を繰り返すことによって、地域の人材育成が機能する」⁴⁾とされ、高校生のみならず、「親（保護者）」への影響も推測されるところである。したがって、高等学校において進路指導を担当する教員の地元の医療や、看護の課題に対する認識が高校生の看護職への進路選択や飛騨圏域での就業の選択に大きな影響を与えると推測できる。

高山市では5年ごとに飛騨圏域の高校3年生を対象に「将来の進路や仕事に関する意識・希望」を調査している。令和5年度の調査⁵⁾によれば、回答者の91.3%が高山市に愛着を感じ、同80.1%が居住地域へ

の継続移住やUターン意向を示している。高山市は、これまで医療機関と行政が一体となって、将来の医療人材の育成・確保につなげる「飛騨メディカルハイスクール事業」⁶⁾を主催し、「未来を担う人材の育成」に着手している。この施策は、高校生の「地元への愛着」と「地元の医療・福祉への貢献」といった意識の高揚につながると考えられるが、看護職に限定されてはいない。高校生の医療職への漠然とした憧憬を着実に看護職への道につなげるためには、高等学校と医療・行政機関に加え、看護専門職育成機関である大学が連携することが必要になる。生徒にとって「地元の医療機関が私たちを必要としている」、「医療職として貢献できる」と実感できる高等学校における取組みを大学教育において継続・発展できれば、地元への帰属意識をさらに深めることができる。このような好循環が、飛騨圏域における医療・福祉分野における人材確保の重大な基盤となるものと考ええる。

そこで本調査では、飛騨圏域にある高等学校の進路指導の教員を対象に聞き取りを行い、進路指導の現状と看護職を志向する高校生の地元愛を育む取組みの工夫について明らかにすることとした。

Ⅱ. 目的

飛騨圏域にある高等学校での進路指導の現状と、看護職を志向する高校生への地元愛を育む進路指導における取組みの工夫を明らかにする。

Ⅲ. 用語の定義

飛騨圏域：岐阜県が地域医療構想で示す構想区域（二次医療圏）で指定した「高山市、飛騨市、下呂市、白川村」⁷⁾とする。

Ⅳ. 調査方法

1. 調査対象者

飛騨圏域にある高等学校6校において進路指導を担当する教員計6名。

2. 調査期間

2024年6月

3. 調査方法

高等学校に訪問し、対象者に30分程度1回の半構造化面接で実施した。インタビューは調査対象者の了解を得て、ICレコーダーにて記録した。インタビュー項目は、①進路指導や進路ガイダンスの実施する時期、②高校生からの進路に関する具体的な相談内容、③進路を認識し始める時期、④大学の多様な入試形態への対応方法、⑤キャリア教育において大学に期待すること、⑥卒業生の進路（Uターン就職）の把握状況、⑦進路指導で大切にしていることの7項目とした。

4. 分析方法

対象者の発言内容をデータとして、逐語録を作成したうえで、それらから意味内容が損なわれないように要約を作成し、類似性に沿って整理して分類した。分類した内容から、飛騨圏域の高等学校における進

路指導の現状と、看護職を志向する高校生への地元愛を育む進路指導における取組みの工夫について分析した。

5. 倫理的配慮

対象者に対しては本調査の目的、方法、個人情報の保護、匿名性の保持、得られた結果は調査以外の目的には使用しないこと、結果の公表方法について口頭で説明し、同意を得たのち実施した。

V. 結果

1. 高等学校における進路指導の現状と看護職を志向する高校生の地元愛を育む取組み

調査協力を得られた対象者 6 名に実施したインタビューは平均 26 分/人であった。得られたデータから 181 の要約を作成し、インタビュー項目に沿って結果を整理した。なお、結果はインタビュー項目ごとに整理したが、その他調査対象者の語りには医療・看護を目指す生徒の割合とその特徴と U ターン就職の現状と高校生が地元愛を持てるようにするための取組みについての語りがあった。

以下、カテゴリを【 】、サブカテゴリを<>、要約を“ ”で示す。

1) 進路指導や進路ガイダンスを実施する時期

進路指導や進路ガイダンスを実施する時期については、26 の要約から 10 のサブカテゴリ、4 つのカテゴリを生成した（表 1）。

飛騨圏域の高等学校において、進路指導や進路ガイダンスを実施する時期については、【1 年生から自分の適性を見極め、段階的に進める】【年間を通じて企業・大学の説明会を実施している】【模擬試験と進路ガイダンスを合わせて実施している】【進路決定後に在校生、中学生に自分の経験を語ってもらう】の 4 つのカテゴリが生成された。

【1 年生から自分の適性を見極め、段階的に進める】のサブカテゴリは、“1 年生から進路ガイダンスをして、3 年間の取組み内容を説明する”などの<進路ガイダンスは 1 年生から段階的に進める>、“総合の探求の時間が週に 1 回あり、そこで自分の適性を見極めることを 1 年生でやっている”といった<1 年生で自分の適性を見極める>、“オープンキャンパスで見て、自分で勉強していきながら進路が決まる”などの<2 年生にオープンキャンパスを勧め、3 年で受験先を決める>であった。

【年間を通じて企業・大学の説明会を実施している】のサブカテゴリは、“2、3 年生には、毎年 5 月に大学の学部・学科説明会を実施して、進路選択が適切にできるように支援している”などの<各学年に大学・分野説明会を定期的に実施する>、“就職、進学する生徒も含めて、将来 U ターンで戻ってくるかもしれないので全員参加で企業説明会に参加している”などの<1 年生から U ターンを期待して、地元の企業実習をしている>、“看護協会にお願いして、看護の出前講座を希望者に実施している”といった<看護の出前講座を実施している>であった。

【模擬試験と進路ガイダンスを合わせて実施している】のサブカテゴリは、“進路ガイダンスは回数が多い。年に 4、5 回進路ガイダンスをしている。模試と進路指導が別々にならないようにしている”といった<進路指導を模試と一緒に複数回実施している>、“1 年生の夏ぐらいから模試があり、その時に少しずつ進路の話をしていく。11 月には大学、専門学校の話聞く機会が設けてある”という<1 年生から模試の時に進路の話をしている>であった。

【進路決定後に在校生、中学生に自分の経験を語ってもらう】のサブカテゴリは、“進学が全部決まった

3 月に、卒業生と語る会として、同じ学部志望をしている生徒向けに主に受験勉強の仕方を伝えてもらっている”という＜進路が決まった後に卒業生として語ってもらっている＞、“中学生のオープンキャンパスの際に卒業生から高校生活について語ってもらう機会を設けている”といった＜卒業生に中学生向けに高校生活について話してもらう＞であった。

表 1 進路指導や進路ガイダンスを実施する時期

カテゴリ	サブカテゴリ	代表的な要約
1 年生から自分の適性を見極め、段階的に進める	進路ガイダンスは 1 年生から段階的に進める	・1 年生の夏休み段階でまず文理を選択し、2 年生からクラスが分かれる ・1 年生から進路ガイダンスをして、3 年間の取組み内容を説明する ・2 年生でコース分けがあるので 1 年生の結構早い段階から取り組んでいる
	1 年生で自分の適性を見極める	・総合の探求の時間が週に 1 回あり、そこで自分の適性を見極めることを 1 年生でやっている
	2 年生にオープンキャンパスを勧め、3 年で受験先を決める	・系列分けする段階で将来どこに行きたいか意識して、2 年生にはオープンキャンパスを勧め、3 年生で進路が決まる ・オープンキャンパスで見て、自分で勉強していきながら進路が決まる ・11 月の三者懇談で最終的進路を決めるという形になる
年間を通じて企業・大学の説明会を実施している	各学年に大学・分野説明会を定期的実施する	・2、3 年生には、毎年 5 月に大学の学部・学科説明会を実施して、進路選択が適切にできるように支援している ・5 月に全学年を対象に分野別説明会として大学、専門学校に来てもらって説明会を実施している
	1 年生から U ターンを期待して、地元の企業実習をしている	・就職、進学する生徒も含めて、将来 U ターンで戻ってくるかもしれないので全員参加で企業説明会に参加している ・進路ガイダンスは模試の後に業者に講演をしてもらったり、地域の人に来ていただいたりして体験型の企業実習をしている ・1 年生のうちにキャリア教育の一環として、I ターンとか U ターンとかも期待して、地元企業説明会をやっている ・地元の職場のインターンシップで経験してるかどうか、U ターン就職の大きな要因になるので積極的に行かせたい
	看護の出前講座を実施している	・看護協会にお願いして、看護の出前講座を希望者に実施している
模擬試験と進路ガイダンスを合わせて実施している	進路指導を模試と一緒に複数回実施している	・進路ガイダンスは回数が多い。年に 4、5 回進路ガイダンスをしている。模試と進路指導が別々にならないようにしている
	1 年生から模試の時に進路の話をしている	・1 年生の夏ぐらいから模試があり、その時に少しずつ進路の話をしていく。11 月には大学、専門学校の話聞く機会が設けてある
進路決定後に在校生、中学生に自分の経験を語ってもらう	進路が決まった後に卒業生として語ってもらっている	・進学が全部決まった 3 月に、卒業生と語る会として、同じ学部志望をしている生徒向けに主に受験勉強の仕方を伝えてもらっている
	卒業生に中学生向けに高校生活について話してもらう	・中学生のオープンキャンパスの際に卒業生から高校生活について語ってもらう機会を設けている

2) 進路指導に関する教員への相談内容

高校生からの進路に関する教員への相談内容については、24 の要約から 7 つのサブカテゴリと 3 つのカテゴリを生成した (表 2)。生成したカテゴリは【夢や目標がなく、自分のやりたいことが見つけれない】

【奨学金や大学での科目選択などの不安】【地元での就職希望相談】であった。

【夢や目標がなく、自分のやりたいことが見つけれられない】のサブカテゴリは、“進路が決めきれない、わからないという入り口で悩む生徒が多い”などの＜そもそも自分の進路が決められない＞、“3年生の11月まで受験校の決め方がわからないって、本当にギリギリです”などの＜3年生になってようやく進路のことに悩む＞、“昔よりも明らかに目標を持って入ってきた生徒がかなり減っている”といった＜夢や目標がなく、自分のやりたいことを見つけれられない＞、＜親子で進路について相談しない＞であった。

【奨学金や大学での科目選択などの不安】のサブカテゴリは、“奨学金を借りられるのかといった金銭面の相談や学力など現実的な話”などの＜奨学金を借りられるのかという金銭面での不安＞、“看護では、試験や専門学校への進学についての相談”といった＜目指す職種になるための科目選択についての相談＞であった。

【地元での就職希望相談】のサブカテゴリは、“相談を受ける就職先では地元の企業が多い。飛騨市、高山市での就職先についての相談が多い”といった＜飛騨圏域での就職についての相談＞であった。

表2 進路指導に関する教員への相談内容

カテゴリ	サブカテゴリ	代表的な要約
夢や目標がなく、自分のやりたいことが見つけれられない	そもそも自分の進路が決められない	・進路が決めきれない、わからないという入り口で悩む生徒が多い ・そもそも大学進学か就職したいのかわからないというところから始まる
	3年生になってようやく進路のことに悩む	・3年生の11月まで受験校の決め方がわからないって、本当にギリギリです ・1、2年生からは進路の相談はなく、3年生になってどんな企業があるのかという相談がある
	夢や目標がなく、自分のやりたいことを見つけれない	・どうやって自分のやりたいことを見つけたらいいですかという質問が多い ・高校入学時に進路が決まっている生徒はほとんどおらず、進路の見つけ方がわからない ・昔よりも明らかに目標を持って入ってきた生徒がかなり減っている ・社会に出るために大学で何を学ぶのか、どうなりたいたのかに悩む
	親子で進路について相談しない	・三者懇談の際に初めて進路の希望を聞くようで、親子で進路について家で話さない
奨学金や大学での科目選択などの不安	奨学金を借りられるのかという金銭面での不安	・奨学金を借りられるのかといった金銭面の相談や学力など現実的な話 ・奨学金については説明会を行い、自分で大学を調べて自分で判断しなさいと指導している
	目指す職種になるための科目選択についての相談	・リハビリに進みたいけど科目をどうしたらいいですかとか、何を取るのがいいのかという相談がある ・看護では、試験や専門学校への進学についての相談がある
	地元での就職希望相談	・相談を受ける就職先では地元の企業が多い。飛騨市、高山市での就職先についての相談が多い

3) 生徒が進路を認識し始める時期

進路を認識し始める時期については、13の要約から5のサブカテゴリ、3つのカテゴリを生成した（表3）。生成したカテゴリは、【2年生のクラス分けから意識し始める】【進路を考え始めるのは2年生で、現実

的に進学先を決めるのは3年生】【勉強と部活を両立すると進路を決めるのは3年の夏休み】であった。

【2年生のクラス分けから意識し始める】のサブカテゴリは、“普通科では2年生でクラス分けがあり、大学などの進路の意識は2年生くらい”などの<2年生のクラス分けから進学先を意識し始める>、“2年生で普通科と理数科のコース分けから、学校推薦か一般試験か、総合型か指定校かを視野に入れて対応していく”という<コース分けから受験方法を考える>であった。

【進路を考え始めるのは2年生で、現実的に進学先を決めるのは3年生】のサブカテゴリは、“2年生の半ばで意識し始め、自分が行く学部をイメージするのは3年生”などの<進路を意識するのは2年生、学部を決めるのは3年生>、“進学先を意識するのは3年生の6月とか、下手すると本当に夏休みみたいな生徒もいる”という<進路を意識するのが遅い子は夏休み明け>であった。

【勉強と部活を両立すると進路を決めるのは3年の夏休み】のサブカテゴリは、“勉強と部活の両立する生徒は進路を決めるのは3年生の夏休み明けになる”などの<部活が終わってから、進路を考え始めるため遅くなる>であった。

表3 進路を認識し始める時期

カテゴリ	サブカテゴリ	代表的な要約
2年生のクラス分けから意識し始める	2年生のクラス分けから進学先を意識し始める	・普通科では2年生でクラス分けがあり、大学などの具体的な進路の意識は2年生くらいから ・1年生の後半に進路希望を出すので、どんどんイメージはしていく
	コース分けから受験方法を考える	・2年生で普通科と理数科のコース分けから、学校推薦か一般試験か、総合型か指定校かを視野に入れて対応していく
進路を考え始めるのは2年生で、現実的に進学先を決めるのは3年生	進路を意識するのは2年生、学部を決めるのは3年生	・2年生の半ばで意識し始め、自分が行く学部をイメージするのは3年生 ・3年生になると模試が増え、希望学部を考える機会が増えるので、そのタイミングが多い
	進路を意識するのが遅い子は夏休み明け	・進学先を意識するのは3年生の6月とか、下手すると本当に夏休みみたいな生徒もいる
勉強と部活を両立すると進路を決めるのは3年の夏休み	部活が終わってから、進路を考え始めるため遅くなる	・勉強と部活の両立する生徒は進路を決めるのは3年生の夏休み明けになる ・部活を一生懸命やっている、引退して5、6月くらいに進路を考え始める ・部活をやっていると第一希望の大学を決めるのが遅めになっている

4) 大学の多様な入試形態への対応方法

大学の多様な入試形態への高等学校の進路指導における対応方法については、13の要約から4つのサブカテゴリ、3つのカテゴリを生成した(表4)。

生成したカテゴリは、【大学入試が複雑になればなるほど忙しくなる】【小論文や面接の指導など、学校全体での対応を行っている】【大学に受かりやすくなり、進学希望にシフトしている】であった。

【大学入試が複雑になればなるほど忙しくなる】のサブカテゴリは、“大学の入学方法が複雑になればなるほど、とにかく忙しくなると覚悟を決めて、推薦入試を希望する生徒が増えているので一番ピークになってくる”などの<入試の方法が複雑になればなるほど忙しくなる>であった。

【小論文や面接の指導など、学校全体での対応を行っている】のサブカテゴリは、“総合型が9月ぐらいから始まってくると生徒の指導が大変で、入試のあり方としては正解だとは思いますが、仕方ないと思っている”などの＜総合型が始まると推薦文と生徒指導で大変になる＞、“小論文は全ての先生で共有しながら対応していき、面接指導も集団や個別で何度か計画をして対応している”などの＜小論文や面接指導を個別・集団でおこなっている＞であった。

【大学に受かりやすくなり、進学希望にシフトしている】のサブカテゴリは、“大学に受かりやすくなった、入りやすくなったというのが、生徒が進学にシフトした理由”などの＜4年制大学でゆっくり学びたいという思いがある＞であった。

表4 大学の多様な入試形態への対応方法

カテゴリ	サブカテゴリ	代表的な要約
大学入試が複雑になればなるほど忙しくなる	入試の方法が複雑になればなるほど忙しくなる	・大学の入学方法が複雑になればなるほど、とにかく忙しくなると覚悟を決めて、推薦入試を希望する生徒が増えているので一番ピークになってくる ・大学受験に関しては、最新の情報を得やすくなってきていて、専門性ができている
小論文や面接の指導など、学校全体での対応を行っている	総合型が始まると推薦文と生徒指導で大変になる 小論文や面接指導を個別・集団でおこなっている	・総合型が9月ぐらいから始まってくると生徒の指導が大変で、入試のあり方としては正解だとは思いますが、仕方ないと思っている ・総合型の推薦は毎年ちよつとずつ増えている印象がある ・小論文は全ての先生で共有しながら対応していき、面接指導も集団や個別で何度か計画をして対応している ・面接だとか小論文とか、そっちについては全校体制で、各専門の先生方がその専門知識を生かして指導していく形で対応している
大学に受かりやすくなり、進学希望にシフトしている	4年制大学でゆっくり学びたいという思いがある	・大学に受かりやすくなった、入りやすくなったというのが、生徒が進学にシフトした理由 ・4年制大学に行けるのなら、ゆっくり学びながら大学生活を謳歌したいと思っており、専門学校だと大変だっている思いが結構ある

5) キャリア教育において大学に期待すること

キャリア教育委において大学に期待することやお願いしたいこととしては、16の要約から9つのサブカテゴリ、5つのカテゴリを生成した（表5）。

生成したカテゴリは、【高校生の選択とミスマッチがないように高等学校での学びと大学での学びにつなげてほしい】【大学生が直接大学で学べること、授業方法など詳しく教えてほしい】【実際に働いている看護師から、仕事の内容や資格について話してもらいたい】【看護や医療の現状、卒業後の就職先などの話を聞かせてもらいたい】【キャリア教育として大学に期待することが思いつかない】であった。

【高校生の選択とミスマッチがないように高等学校での学びと大学での学びにつなげてほしい】のサブカテゴリは、“学部・学科説明会には隣のA大学の看護学科の先生方に出席講義をしていただいております、毎年一定数希望する生徒がいる”などの＜学部学科説明会で、大学教員に看護について話をしてもらいたい＞、“できるだけ高校生の選択とミスマッチがないように、大学での実際の学びがどのようなものなのかを伝えてほしい”などの＜高校生の選択とミスマッチがないように、総合探求と大学での学びの橋渡しがあ

るといい>であった。

表5 キャリア教育において大学に期待すること

カテゴリ	サブカテゴリ	代表的な要約
高校生の選択とミスマッチがないように高等学校での学びと大学での学びにつなげてほしい	学部学科説明会で、大学教員に看護について話をしてもらいたい	・学部・学科説明会には隣のA大学の看護学科の先生方に出前講義をしていただいており、毎年一定数希望する生徒がいる ・進学ガイダンスでは専門学校や大学にも来てもらっているが、総合大学なので看護にピンポイントな話にはならない ・1年生の進路ガイダンスで大学での学びやコンピテンシーとかテストを受けてこんなふう伸びてますと説明して下さることもあります
	高校生の選択とミスマッチがないように、総合探求と大学での学びの橋渡しがあるといい	・できるだけ高校生の選択とミスマッチがないように、大学での実際の学びがどういうものなのかを伝えてほしい ・総合的な探求の時間で調べ学習をしていることが大学で学ぶことと橋渡しできるようになるといい
大学生が直接大学で学べること、授業方法など詳しく教えてほしい	学部生が来て、学科で学ぶこと、授業方法など詳しく教えてほしい	・大学の学生が高等学校に来てくれて、この学科ではこれを学べるとか、授業方法とか、もっと詳しく情報をいただけるといい ・医療系大学でどのような学習をしているのかを聞きたい
	オープンキャンパスでしっかり見て、感じてきてほしい	・オープンキャンパスをしっかりとってくれるなら、生徒が自分の行きたいとこしっかり見て、感じていきなさいっていう思いがあります
実際に働いている看護師から、仕事の内容や資格について話してもらいたい	実際に働いている看護師から、どのような仕事があるのか、取れる資格について話してもらいたい	・看護師でもいろんな働き方があることがわからない生徒がいっぱいいるので、実際に働いている看護師から、さまざまな資格やキャリアがあることを話してもらえるとすごくありがたい ・病院からの出前授業ではさまざまな職種の方に来ていただき、百何人の生徒が参加する
	分野別の説明会で看護を希望する学生に看護の現状や就職について話してもらいたい	・分野別の説明会で大学や専門学校に来てもらい、2、3年生で看護を希望してる生徒に話をする機会を設けている ・大学の方に来ていただいて看護と医療の現状や、入試の話もしていただいたことがある ・大学や企業の方に来てもらう機会はありますが、この学部に来ると就職先がこういうところがありますといった説明になっている
キャリア教育として大学に期待することが思いつかない	地元の就職・進学先を説明する機会があるといいが、時間がない	・就職希望の生徒に対しては地元の企業の方が来て話をしてくださるので、進学希望の生徒にもそういう説明する機会があってもいいが、なかなか時間がない
	看護師の希望者が少なく、来てもらうのも申し訳ない	・専門とか最先端的な話を聞けるが、正直生徒の数が少ないと、来ていただいても生徒が数名しかいないことも多いので、申し訳ないと思う
	特に思いつかない	・キャリア教育として大学に期待することは…特に

【大学生が直接大学で学べること、授業方法など詳しく教えてほしい】のサブカテゴリは、“大学の学生

が高等学校に来てくれて、この学科ではこれを学べるとか、授業方法とか、もっと詳しく情報をいただけるといい”などの＜学部生が来て、学科で学ぶこと、授業方法など詳しく教えてほしい＞、“オープンキャンパスをしっかりとやってくれるなら、生徒が自分の行きたいとこしっかり見て、感じていきなさいっていう思いがあります”といった＜オープンキャンパスでしっかり見て、感じてきてほしい＞であった。

【実際に働いている看護師から、仕事の内容や資格について話してもらいたい】のサブカテゴリは、“病院からの出前授業ではさまざまな職種の方に来ていただき、百何人の生徒が参加します”などの＜実際に働いている看護師から、どのような仕事があるのか、取れる資格について話してもらいたい＞であった。

【看護や医療の現状、卒業後の就職先などの話を聞かせてもらいたい】のサブカテゴリは、“分野別の説明会で大学や専門学校に来てもらい、2、3年生で看護を希望してる生徒に話をする機会を設けている”などの＜分野別の説明会で看護を希望する学生に看護の現状や就職について話してもらいたい＞であった。

【キャリア教育として大学に期待することが思いつかない】のサブカテゴリは、“就職希望の生徒に対しては地元の企業の方が来て話をしてくださるので、進学希望の生徒にもそういう説明する機会があってもいいが、なかなか時間がない”といった＜地元の就職・進学先を説明する機会があるといいが、時間がない＞、＜看護師の希望者が少なく、来てもらうのも申し訳ない＞、＜特に思いつかない＞であった。

6) 卒業生の進路（Uターン就職）の把握状況

卒業した生徒の地元へのUターン就職などの把握状況については、8つの要約から2つのサブカテゴリ、1つのカテゴリ【進路調査はしていないため、大学教員や卒業生、企業の方の訪問時に情報を得る】を生成した（表6）。

【進路調査はしていないため、大学教員や卒業生、企業の方の訪問時に情報を得る】のサブカテゴリは、“学校として大学卒業後の進路調査はしていないので、大学の先生が訪問していただいた時に、卒業後の進路を教えてもらっている”などの＜大学の先生や卒業生、企業が訪問した時に教えて頂く＞、＜同窓会で就職後の情報を取っている＞であった。

表6 卒業生の進路（Uターン就職）の把握状況

カテゴリ	サブカテゴリ	代表的な要約
進路調査はしていないため、大学教員や卒業生、企業の方の訪問時に情報を得る	大学の先生や卒業生、企業が訪問した時に教えて頂く	・学校として大学卒業後の進路調査はしていないので、大学の先生が訪問していただいた時に、卒業後の進路を教えてもらっている ・把握ができていないので、大学の教員が来られた時や、繋がりがある後輩や遊びに来てくれた生徒から就職の情報を得ている ・卒業生が訪ねてきた時に聞く程度で追跡調査まではできてない ・企業の方が訪問してきた時に卒業生が働いているという情報で知る大学、進学した後追い調査は全然できない。 ・地元にとだけ戻っているのかほとんど把握してないのが現状
	同窓会で就職後の情報を取っている	・同窓会や結婚式に呼ばれる機会も多く、そういうところで就職後の情報を得ている

7) 進路指導で大切にしていること

高等学校の進路指導において大切にしていることとしては、11の要約から6つのサブカテゴリ、4つの

カテゴリを生成した（表7）。

生成したカテゴリは、【本人が自分の意思で納得して進路選択できるように情報を与えている】【自分のやりたいことと適性のミスマッチなく選択できるよう支援する】【進路を決めたらあきらめないように生徒の頑張りに合わせて声掛けをする】【進学・就職先の社会とのつながりを考えられるように支援する】であった。

【本人が自分の意思で納得して進路選択できるように情報を与えている】のサブカテゴリは、＜進路選択のメリット・デメリットを伝え、自分で腹落ちして決めきる＞＜親の意向も強く響くが、本人の意思を一番に考えてもらう＞＜本人が本当にベストな選択ができる情報を与える＞であった。

【自分のやりたいことと適性のミスマッチなく選択できるよう支援する】のサブカテゴリは、“生徒の適性が本人のやりたいこととミスマッチがないようにすることが進路指導で1番大切だと思う”などの＜本人のやりたいことと適性がマッチしているか、ミスマッチがないようにする＞であった。

表7 進路指導で大切にしていること

カテゴリ	サブカテゴリ	代表的な要約
本人が自分の意思で納得して進路選択できるように情報を与えている	進路選択のメリット・デメリットを伝え、自分で腹落ちして決めきる	・最終的には自分で決めきるっていうことを進路指導では大切にしており、選択肢を伝え、それを選んだ時のメリットとデメリットを考えさせながら、生徒が最後にはしっかり腹落ちするようにしている
	親の意向も強く響くが、本人の意思を一番に考えてもらう	・お金の面では親の意見が子どもに強く響くことがあるかもしれないが、基本的には生徒本人の意思を一番に考えてほしいということを大切にしている
	本人が本当にベストな選択ができる情報を与える	・本当にその生徒にとってベストな選択なのか、ちゃんと考えてあげることを大切にしている。最終的に決定するのは本人なので、しっかりと情報を与えてあげることが大事だと思う
自分のやりたいことと適性のミスマッチなく選択できるよう支援する	本人のやりたいことと適性がマッチしているか、ミスマッチがないようにする	・生徒の適性が本人のやりたいこととミスマッチがないようにすることが進路指導で1番大切だと思う ・大学に入ってから「こんなじゃなかった」と思っほしくないで、そのために視野を広げているいろいろ調べた上で、私はこれがやりたいって思えるといいと思って指導している
進路を決めたらあきらめないように生徒の頑張りに合わせて声掛けをする	進路を決めたら、折れそうになっても諦めないように持つていく	・進路決定後に模試の結果で生徒も折れてしまうこともあるため、よく考えて決めたことだから諦めて安易に方向性を変えずに、もうちょっと頑張っていこうと声を掛けている ・折れそうになった時にどうサポートするか、ケースバイケースで声掛けをいろいろと変えている
進学・就職先の社会とのつながりを考えられるように支援する	学部選択とその後の社会とのつながりについて考えられるようにしている	・学部選択がその後どのように社会と関わっていくかという選択になるため、看護ではもっと地域について考えられるよう支援している ・大学進学や就職がゴールではなく、その先を見据えて考えられることを大切にしている

【進路を決めたらあきらめないように生徒の頑張りに合わせて声掛けをする】のサブカテゴリは、“折れそうになった時にどうサポートするか、ケースバイケースで声掛けをいろいろと変えている”などの＜進路を決めたらあきらめないように生徒の頑張りに合わせて声掛けをする＞であった。

【進学・就職先の社会とのつながりを考えられるように支援する】のサブカテゴリは、“学部選択がその後どのように社会と関わっていくかという選択になるため、看護ではもっと地域について考えられるよう支援している”などの＜学部選択とその後の社会とのつながりについて考えられるようにしている＞であった。

8) 医療・看護を目指す生徒の割合とその特徴

医療・看護を目指す生徒の割合とその特徴については、30 の要約から 9 つのサブカテゴリ、5 つのカテゴリを生成した（表 8）。

生成したカテゴリは、【医療・看護を目指す生徒は毎年 10 名程度】【実際に働く姿を見て、看護師や教師を目指す生徒が多い】【看護師を目指す生徒は中学生時の看護体験などで、高校入学時に進路が決まっている】【看護師を目指す生徒は地元で就職したい思いがあり、家から通える専門学校がメリット大きい】【看護師を目指す生徒は総合探求で飛騨圏域の地域医療を調べて理解する】であった。

【医療・看護を目指す生徒は毎年 10 名程度】のサブカテゴリは、“医療系とか看護を目指す生徒は毎年 10 名前前で 1 割くらいいて今は男子も 1 人、2 人毎年そのなかにいる”などの＜看護を目指す子は毎年 10 名前前で男子も 1～2 名いる＞、“職業や資格に関する進路は人気があり、手堅い傾向はあると思う”といった＜資格に関する手堅い傾向がある＞であった。

【実際に働く姿を見て、看護師や教師を目指す生徒が多い】のサブカテゴリは、“高山には大きな企業も大学もなく、実際に働いてる姿を見るのは教員や医療職が多いので希望者も多くなる”などの＜親や実際に見る機会の多い教員や医療職の希望が圧倒的に多い＞、“飛騨メディカルハイスクールとか、夏休みとかのいろんな病院のふれあい看護体験に参加して決めていく”といった＜メディカルハイスクール、看護体験を通じて進路を決める＞であった。

【看護師を目指す生徒は中学生時の看護体験などで、高校入学時に進路が決まっている】のサブカテゴリは、“中学校の時に看護体験に行って、看護師になりたいと入学してくる生徒の方が、高校で看護師を目指す生徒より多い”などの＜看護師を目指す子は高校に入ってから来た時点で進路が決まっている＞であった。

【看護師を目指す生徒は地元で就職したい思いがあり、家から通える専門学校がメリット大きい】のサブカテゴリは、“看護師の四年制大学に行く生徒もいるが、地元の専門学校に行く生徒も多く、ある程度地元で就職したいという思いがある”などの＜地元の専門学校を志望する学生は地元で就職したいという思いがある＞、“大学を決める際の授業料の要素が大きいので、公立大学や公立の看護専門学校が第 1 希望になることが多い”などの＜授業料の関係で家から通える看護専門学校のメリットが大きい＞、“地元を出ることが前提で、地元の看護専門学校を中心に愛知県の大学にいきなり飛ぶ状況にある”といった＜看護は地元の専門学校か県外の大学になる＞であった。

【看護師を目指す生徒は総合探求で飛騨圏域の地域医療を調べて理解する】のサブカテゴリは、“総合探求の時間で、医療に取り組む生徒は毎年おり、自分たちで地域医療のことを調べたりしている”などの＜総合探求で地域の医療について自分たちで調べて理解する＞であった。

表 8 医療・看護を目指す生徒の割合とその特徴

カテゴリ	サブカテゴリ	代表的な要約
医療・看護を目指す生徒は毎年10名程度	看護を目指す子は毎年 10 人前後で男子も 1〜2 名いる	・医療系とか看護を目指す生徒は毎年 10 名前後で 1 割くらいいて今は男子も 1 人、2 人毎年そのなかにいる ・医療系としては、看護専門学校を目指している生徒が 10 数名くらい ・医療系の希望が全くゼロになるってことはない ・例年、看護専門学校には 10〜15 人ぐらい希望がある
	資格に関する手堅い傾向がある	・職業や資格に関する進路は人気があり、手堅い傾向はあると思う
実際に働く姿を見て、看護師や教師を目指す生徒が多い	親や実際に見る機会の多い教員や医療職の希望が圧倒的に多い	・高山には大きな企業も大学もなく、実際に働いてる姿を見るのは教員や医療職が多いので希望者も多くなる ・看護師をされておられる親を見て、自分も看護師になりたいっていう生徒も多い、資格を取っておくといいいという親からの意向もある
	メディカルハイスクール、看護体験を通じて進路を決める	・飛騨メディカルハイスクールとか、夏休みとかのいろんな病院のふれあい看護体験に参加して決めていく
看護師を目指す生徒は中学生時の看護体験などで、高校入学時に進路が決まっている	看護師を目指す子は高校に入って来た時点で進路が決まっている	・医療系では高校入った時から看護師になりたい生徒がほとんど ・逆に看護師以外の選択肢を考えてるの？という心配もするぐらい、決めて入学してきている ・中学校の時に看護体験に行って、看護師になりたいと入学してくる生徒の方が、高校で看護師を目指す生徒より多い ・特に医療関係に関しては結構早い段階から、医療職に興味を持っている印象がある
看護師を目指す生徒は地元で就職したい思いがあり、家から通える専門学校がメリット大きい	地元の専門学校を志望する学生は地元で就職したいという思いがある	・看護師の四年制大学に行く生徒もいるが、地元の専門学校に行く生徒も多く、ある程度地元で就職したいという思いがある ・看護系希望の生徒はやっぱり地元に残りたいっていう思いがあるが、一旦大きい病院に就職するみたいな感じ
	授業料の関係で家から通える看護専門学校のメリットが大きい	・大学を決める際の授業料の要素が大きいので、公立大学や公立の看護専門学校が第 1 希望になることが多い ・看護専門学校以外に通えるところがほぼないので、高山に家がある生徒は高山の看護専門学校に行く
	看護は地元の専門学校か県外の大学になる	・地元を出ることが前提で、地元の看護専門学校を中心に愛知県の大学にいきなり飛ぶ状況にある
看護師を目指す生徒は総合探求で飛騨圏域の地域医療を調べて理解する	総合探求で地域の医療について自分たちで調べて理解する	・総合探求の時間で、医療に取り組む生徒は毎年おり、自分たちで地域医療のことを調べたりしている ・探求していく中で看護を希望する生徒はドクターヘリのことも調べていた

9) Uターン就職の現状と高校生が地元愛を持てるようにするための取組み

Uターン就職の現状と、高校生が地元愛を持てるようにするための取組みについては、40 の要約から 15 のサブカテゴリ、6つのカテゴリを生成した（表9）。

生成したカテゴリは、【ライフステージに合わせて本人の選択と地元のすり合わせを考える】【地元にも仕事があることを理解するために、インターンシップや説明会の参加を勧める】【総合探求の時間で地元の医療の現状を調べ、出前授業で地元愛を育む】【看護師を目指す生徒は地元志向が強く、県内に進学・就職する】【自然の豊かさなど高山の魅力を感じているが地域特有の生活の不便さがある】【地元愛があったとしても、都市部とは給与や福利厚生面が全然違うため戻ってこない】であった。

【ライフステージに合わせて本人の選択と地元のすり合わせを考える】のサブカテゴリは、“潜在的に地元に戻ってきたい生徒もいるが、四年制大学で看護学部というと飛騨圏域を出る生徒が多い”などの＜地元に戻りたい思いもあるが飛騨圏域を出る生徒が多く、ライフステージに合わせた選択を大切にすると、
“将来、地元に戻る生徒が多いとは思ってはいるが、やはり大学を卒業した後のなりたい自分を見据えて大学進学することを大切にしている”といった＜地元に戻る生徒も多いが、大学卒業後の進路を見据えて進学することを大切にすると、＜看護系で大学進学を考える場合、家族を含め地元を出ることを考える＞であった。

【地元にも仕事があることを理解するために、インターンシップや説明会の参加を勧める】のサブカテゴリは、“高校生のうちに、地域、地元企業との関わりを持たせ、大学卒業時に、地元が選択肢として入るようにしている”などの＜地元へのUターンは地域とのかかわりなどで、選択肢として地元が入るように工夫をしている＞、“就職しない生徒も、進学する生徒も含めて将来Uターンで戻ってくるかもしれないため全員参加で行っている”などの＜Uターン就職につながるよう地元企業説明会を1年生からキャリア教育として実施している＞、“地元に働く場所はいっぱいあるが、十分に認知されてないのか、企業の方も大卒者が受けに来なくなったと言っている”などの＜地元に働ける場所があることを知らないまま地元を出て行ってしまふ＞であった。

【総合探求の時間で地元の医療の現状を調べ、出前授業で地元愛を育む】のサブカテゴリは、“総合探求の時間で高山市の課題を捉え、住みやすい暮らしを作るにはどうするのかを考えている”などの＜総合探求の時間で、高山市の医療の現状や高齢化について考え、地元愛を育む＞、“高山市役所の担当者に来ていただき、医療の現状や高齢化について話していただいている”などの＜病院・市役所からの出前授業で地元の医療について考える＞であった。

【看護師を目指す生徒は地元志向が強く、県内に進学・就職する】のサブカテゴリは、“看護では県内の看護学校とか四年制大学などが近場にあるので地元志向の生徒が多く、県外に行く方が珍しい”などの＜看護は地元志向の生徒が多く、県内の看護学校や四年制大学にいく＞、＜Uターンで地元に戻ってきている方だが、昔よりは少なくなっている＞であった。

【自然の豊かさなど高山の魅力を感じているが地域特有の生活の不便さがある】のサブカテゴリは、“観光地としてはすごい楽しめる、いいところだと感じてはいる”などの＜自然豊かで新緑も見られ、高山祭もあり、観光地として楽しめる＞、“どうしても遊ぶ施設が少ないかな、どこかに出掛けるとするのがまず大変”などの＜遊ぶ施設が少なく、出かけるのも大変という不便がある＞であった。

【地元愛があったとしても、都市部とは給与や福利厚生面が全然違うため戻ってこない】のサブカテゴリは、“都市部だと基本給が高校生でも20万円は普通に超えているが、地元では20万円を超える企業はほとんどない”などの＜基本給や福利厚生面が都市部とは全然違うので、都市部に行くとなかなか戻ってこ

ない>、“今、どこも人材不足で誰かいませんかと高校に来られるのですが、やっぱり出てしまうとなかなか戻りにくい”といったく地元は人材不足だと理解しても、地元には戻りにくい>、“地元が好きだと言っていた生徒も、そのまま進学先で就職することもある、やっぱり条件が違うからだと思う”といったく地元が好きだとしても、条件が違うため、進学先で就職してしまう>であった。

表 9 U ターン就職の現状と高校生が地元愛を持てるようにするための取組み

カテゴリ	サブカテゴリ	代表的な要約
ライフステージに合わせて本人の選択と地元の選択と地元のすり合わせを考える	地元に戻りたい思いもあるが、飛騨圏域を出る生徒が多く、ライフステージに合わせた選択を大切にする	- 潜在的に地元に戻ってきたい生徒もいるが、四年制大学で看護学部という飛騨圏域を出る生徒が多い - 二十何歳になった時に、地元に戻るのか、勤務地で結婚するかみたいな話になるのは事実 - 就職、結婚、子育て、介護というライフステージに合わせて、どこに地元が絡むのか、本人の選択とすり合わせることを考える
	地元に戻る生徒も多いが、大学卒業後の進路を見据えて進学することを大切にする	将来、地元に戻る生徒が多いとは思ってはいるが、やはり大学を卒業した後のなりたい自分を見据えて大学進学することを大切にしている
	看護系で大学進学を考える場合、家族を含め地元を出ることを考える	看護系では地元を出ることを前提で家族も本人も考えており、専門学校では地元を中心に考えるが、大学進学では都会で暮らしたいという思いで愛知県にいきなり選択が広がる
地元にも仕事があることを理解するために、インターンシップや説明会の参加を勧める	地元へのUターンは地域とのかかわりなどで、選択肢として地元が入るように工夫をしている	- 高校生のうちに、地域、地元企業との関わりを持たせ、大学卒業時に、地元が選択肢として入るようにしている - 地元企業のインターンシップに参加することがUターン就職の大きな要因になるため、インターンシップに積極的に行かせたい
	U ターン就職につながるよう地元企業説明会を1年生からキャリア教育として実施している	- 就職しない生徒も、進学する生徒も含めて将来Uターンで戻ってくるかもしれないため全員参加で行っている 1年生のうちにキャリア教育として、U ターンを期待して地元企業説明会をやっている
	地元に働ける場所があることを知らないまま地元を出て行ってしまう	- 地元に働く場所はいっぱいあるが、十分に認知されてないのか、企業の方も大卒者が受けに来なくなったと言っている - 知らないまま地元を出て行って、そのまま知らないまま地元が選択肢に入らないのはちょっと残念
総合探求の時間で地元の医療の現状を調べ、出前授業で地元愛を育む	総合探求の時間で、高山市の医療の現状や高齢化について考え、地元愛を育む	- 総合探求の時間で高山市の課題を捉え、住みやすい暮らしを作るにはどうするのかを考えている - 地元愛に繋がればと思い、総合探求の時間で自分たちの住んでいる高山市のことを考えようという授業をしている - 高山市の課題や良い点を考えたりしている
	病院・市役所からの出前授業で地元の医療について考える	- 高山市役所の担当者に来ていただき、医療の現状や高齢化について話していただいている - 近隣の病院から出前授業として、医師、看護師、薬剤師などの

		職種に来てもらっている ・先輩からの研究を引き継いで総合探究の時間を使って地域の地域医療のことを調べるというのをずっとやっている ・探求をしていく中で医学部や看護に行きたい生徒はそれを研究として取り組んでいる
看護師を目指す生徒は地元志向が強く、県内に進学・就職する	看護は地元志向の生徒が多く、県内の看護学校や四年制大学に行く	・看護では県内の看護学校とか四年制大学などが近場にあるので地元志向の生徒が多く、県外に行く方が珍しい ・看護系希望の生徒は、一旦大きい施設に就職をするが地元に戻ってきたい思いがある ・大学卒業してすぐ地元に戻ってくる生徒は医療系とか公務員とか一般企業くらい
	Uターンで地元に戻ってきている方だが、昔よりは少なくなっている	・Uターンで地元に戻ってきている方だと思うが、昔よりも戻ってくる率は少なくなったような気がする
自然の豊かさなど高山の魅力を感じているが地域特有の生活の不便さがある	自然豊かで新緑も見られ、高山祭もあり、観光地として楽しめる 遊ぶ施設が少なく、出かけるのも大変という不便がある	・自然豊かで新緑もきれいで、高山祭りだとか ・観光地としてはすごい楽しめる、いいところだと感じている ・生活圏があり、高校生が1人で行けと言われるとなかなか…、でも、遊びに行くときはなんとでもなると思う ・どうしても遊ぶ施設が少ないかな、どこかに出掛けるというのがまず大変 ・高山や古川まで出ていくのも30分、市役所も30分くらいかかってしまう
地元愛があったとしても、都市部とは給与や福利厚生面が全然違うため戻ってこない	基本給や福利厚生面が都市部とは全然違うので、都市部に行くとなかなか戻ってこない 地元は人材不足だと理解しても、地元には戻りにくい 地元が好きだとしても、条件が違うため、進学先で就職してしまう	・給料も都市部とは違い、高校生でも5万円くらい違う ・都市部だと基本給が高校生でも20万円は普通に超えているが、地元では20万円を超える企業はほとんどない ・年間休日とか福利厚生面も都市部とは全然違い、生活費を考えると地元の方が絶対に安いから都市部に行くに戻ってこない ・今、どこも人材不足で誰かいませんかと高校に来られるのですが、やっぱり出てしまうとなかなか戻りにくい ・地元が好きだと言っていた生徒も、そのまま進学先で就職することあつて、やっぱり条件が違うからだと思う

VI. 考察

飛騨圏域の高等学校における進路指導を担当する対象者から得られた結果をもとに、高等学校での進路指導の現状と特徴、看護職を志向する高校生の地元愛を育む取組みの工夫について検討し、それらから看護職を志向して進学する学生を受け入れる大学に求められる役割について考察する。

1. 高等学校での進路指導の現状と特徴

飛騨圏域の高等学校での進路指導の現状としては、自分の適性と進路がミスマッチをしないようにする支援と、生徒が決めた進路に向かって自己実現できる継続的・計画的支援が特徴的であった。

自分の適性と進路のミスマッチをしないようにする支援としては、“1年生から進路ガイダンスをして、3年間の取組み内容を説明する”というように早い段階から進路指導の道筋の立て方を生徒に示し、自らが将来の進路を見据えて考え、選択をしていく必要性について意識づけをしている。そのうえで“総合の探求の時間が週に1回あり、そこで自分の適性を見極めることを1年生でやっている”や“1年生の後半に進路希望を出すので、どんどんイメージはしていく”という自分の将来の生き方を考えるうえでまずは自分の適性を見極められることを重要視している。

高等学校における進路指導とは、「卒業時の進路をどう選択するかを含めて、更にどういう人間になり、どう生きていくことが望ましいのかといった長期的展望に立って指導・援助するという意味で“生き方の指導”とも言える教育活動である」とされる⁸⁾。本調査において、進路指導を担当する教員は、“生徒の適性が本人のやりたいこととミスマッチがないようにすることが進路指導で1番大切だと思う”や“大学進学や就職がゴールではなく、その先を見据えて考えられることを大切にしている”と考えていた。進路指導として単に卒業後の志望校や就職先を選択するだけでなく、生徒が自分の能力や適性を早期に発見し、将来の自己像を明確にしたうえで、社会的・職業的自己実現のために納得して進路を選択することを通して、どのような生き方を実現したいのかを深く考えることを3年間の教育活動全体を通じて実践しているものと思われる。職業経験のない生徒が自分の知識や経験に基づくキャリア探索はうまくいかない可能性も高く、進路指導を担当する教員のサポートや進路ガイダンスによって、自分の適性と進路選択を適合させていく経験は卒業後の人生においてさまざまな課題に直面した際の柔軟な対応力となり得る重要な支援であると考えた。

生徒が決めた進路に向かって自己実現できる継続的・計画的支援については、＜進路を決めたら、折れそうになっても諦めないように持っていく＞ことや＜学部選択とその後の社会とのつながりについて考えられるようにしている＞といったように生徒が自分の将来について明確な目的意識を持ち続け、主体的に自己の進路を選択・決定できる能力の伸長に継続的に働きかけていた。経済構造の変化や雇用の多様化に伴い、現代の子どもたちは自分の将来を考えるのに役立つ理想とする大人のモデルが見付けにくく、自らの将来に向けて希望あふれる夢を描くことも容易ではない。併せて自分で意思決定ができない、自己肯定感をもてない、将来に希望をもつことができないといった特性も見受けられるとされる⁹⁾。進路指導に関する教員への相談内容において、高等学校入学時には夢や目標がなく、“どうやって自分のやりたいことを見つけたらいいですかという質問が多い”という生徒の特性を踏まえ、将来への希望を持ちながら自分で決めるための支援として、＜進路選択のメリット・デメリットを伝え、自分で腹落ちして決めきる＞ことで生徒の自己決定を尊重し、自己肯定感の維持・向上に配慮した個別性の高い進路指導となっていることが特徴であると考えた。

2. 看護職を志向する高校生の地元愛を育む取組みの工夫

高山市が飛騨圏域の高校3年生を対象とした調査では、約8割が居住地域への継続移住やUターン意向を示した調査結果がありつつも、飛騨圏域においては医療・福祉の担い手が減少していく状況にあり、次世代を担う人材の確保と養成のための地元愛を育む工夫が求められる。

本調査では、“高山には大きな企業も大学もなく、実際に働いてる姿を見るのは教員や医療職が多いので

希望者も多くなる”といった傾向があり、“医療系とか看護を目指す生徒は毎年 10 名前後で 1 割くらいいて今は男子も 1 人、2 人毎年そのなかにいる”など自分の将来を考える身近な大人のモデルとしてイメージしやすい看護職を志向する生徒が毎年一定数いることがわかった。進路指導を担当する教員は、“1 年生のうちにキャリア教育として、U ターンを期待して地元企業説明会をやっている”ことや“近隣の病院から出前授業として、医師、看護師、薬剤師などの職種に来てもらっている”という取組みを企画して、生徒が地元の医療について考えられる機会を設けている。その中でも“総合探究の時間で高山市の課題を捉え、住みやすい暮らしを作るにはどうするかを考えている”などの総合探究の時間で、高山市の医療の現状や高齢化について考え、地元愛を育むことが特徴的な取組みの工夫であった。

「総合的な探究（学習）の時間」は 1999 年の学習指導要領改訂で創設されたものであり、変化の激しい社会に対応して、探究的な見方・考え方を働かせ、横断的・総合的な学習を行うことを通して、よりよく課題を解決し、自己の生き方を考えていくための資質・能力を育成することを目標としたものである¹⁰⁾。自分の身近な地域や現実社会にある問題の解決に向けて、他者と協力しながら探求していくプロセスは生徒の自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、行動する能力を一層伸ばしていくことにつながる。

飛騨圏域の高等学校において看護を志向する生徒の地元愛を育む取組みとして、「総合的な探究の時間」を効果的に活用し、高山市周辺の医療や看護、介護の現状について自ら調べ、課題を分析し、医療・看護職として地域に貢献できる生き方や働き方を深く考えている。今回の調査では“先輩からの研究を引き継いで総合探究の時間を使って地域の医療のことを調べるというのをずっとやっている”というように先輩の探求を引き継ぎながら、さらに発展させて地域医療を考える機会を設けている。この経験は生徒にとって「地域の医療機関が私たちを必要としている」、「医療職として地域に貢献できる」と実感することができ、飛騨圏域での将来的な就業選択に寄与する非常に有用な進路指導になると考える。

また総合探究の時間と併せて、“近隣の病院から出前授業として、医師、看護師、薬剤師などの職種に来てもらっている”ことや、“高山市役所の担当者に来ていただき、医療の現状や高齢化について話していただいている”など病院・市役所からの出前授業で地元の医療について考える機会を設けている。思春期・青年期はアイデンティティの確立や進路選択の過程において同一化を試みる時期であり、その人物の特性をロールモデルとして見習おうとする。ロールモデルの存在は高校生にとって将来像の具現化に貢献する¹¹⁾とされる。また、生徒自身のもつ見通しを社会で実現している人や、近い価値観を持つ人物（＝ロールモデル）を見出すことで自分の将来の生き方や人生について考えるキャリア発達が促される¹²⁾。地元の行政担当者から地域医療における現状を聞くことで課題を改めて認識し、実際に医療職として課題改善に貢献することを実現している姿を見ることは、看護職を志向する高校生のロールモデルとなり、地元愛を持って働くキャリア発達につながるものと考えられる。

松原らの研究では、看護大学で学ぶ学生が高山市での研修に参加したことで、地域包括ケアシステムの魅力を感じ、高山市への就業の関心の高まりを図りながらキャリア形成ができ、将来の高山市への U・I ターンへの動機づけを図ることができたと報告している¹³⁾。実際に地域に出向き、そこで働く高山市の保健・医療・福祉分野のスペシャリストから臨床の状況を踏まえた講義を受けることがロールモデルや地元愛を育むことにつながるということが示唆されており、大学生に対しても有用なキャリア開発であると考えられる。

3. 看護職を志向する高校生が将来の夢を具現化するための大学に求められる役割

高校生の抱く看護職への漠然とした憧憬を着実に看護職への道につなげるためには、高等学校と医療・行政機関に加え、看護専門職育成機関である大学が連携することが重要になる。キャリア教育において大学に期待することは、【高校生の選択とミスマッチがないように高等学校での学びと大学での学びにつなげ

てほしい】【大学生が直接大学で学べること、授業方法など詳しく教えてほしい】【看護や医療の現状、卒業後の就職先などの話を聞かせてもらいたい】といった内容があり、高等学校での学びの連携、進路指導における連携が求められるものと考える。

高等学校での学びの連携としては、高大連携の重要性が増してきており、大学の学びを高校生に体験してもらうアカデミック・インターンシップは、高等学校の学びと大学の学びをつなぐ教育の高大接続の意味がある¹⁴⁾とされる。大学における看護の体験を通して自らの進路を検討する機会となり、臨床現場のような看護実践の体験だけでなく、科学的根拠の解説とそれに基づいた看護を学ぶことの奥深さを理解することができる。高等学校での「総合探求の時間」での学びや気づきをもとに抱いた課題意識を、大学でより深い探究心を持って学ぶことができる体験が、高校生のキャリアをより明確にするために重要な機会になると考える。

進路指導における高大連携としては、大学教員が高等学校での進路ガイダンスに出向いて、看護系大学の学修環境や卒業後の働き方に関する情報提供をすることで、生徒は卒業後の進路への不安を払拭することができる。また、＜学部生が来て、学科で学ぶこと、授業方法など詳しく教えてほしい＞という要望もあり、生徒は同じ看護師等の目標をもつ学部生の学びなどの体験談を聞くことで身近な存在として受け入れやすく、高校生のキャリア発達に寄与できるものと考える。

一方で、【キャリア教育として大学に期待することが思いつかない】という課題も明らかとなった。高大連携において、高等学校教員は大学教育の状況についての、大学教員は高等学校教育の状況についての理解が十分とは言えず、お互いのことをよく理解する必要があるとの指摘がある¹⁵⁾。今後、高校生のキャリア教育における高等学校と看護系大学間の連携の意味・目的を明確にしたうえで実践していくことが重要である。

また、高校生の選択とのミスマッチの防止に関する課題として、実際に看護大学に進学してから、看護師になることを断念する学生がいる。南本らは看護基礎教育機関を退学した学生の退学に至る経験を分析し、新たな学習環境への違和感の感知による在籍への迷いが生じたこと、想像と現実の学びの乖離の知覚による看護師志望意思の動揺が背景にあった¹⁶⁾と報告している。看護学生は入学して1・2年の早い段階から「解剖・生理学」「病態論」などに加えて、基礎看護学を学ぶ。この初期段階でつまづく学生は、看護学に対する理解不足があると考えられる。とりわけ、3年次の専門領域実習は各論において『実践』から学びを深める内容である。その意味で、高等学校におけるメディカルハイスクール施策、総合的な探求の時間は臨床現場を観る・触れる体験学習であり、ミスマッチの防止につながる。著者ら大学教員としての課題は、飛騨圏域で行われている看護人材育成をどのように大学教育に繋げられるかであり、そのために、出前授業やオープンキャンパスなどの高大連携で看護の魅力や可能性、教育の特徴を伝えることである。現時点では、高等学校 - 大学 - 臨床という流れの中で相互補完は十分にできていない。これは今後の課題である。

VII. 結論

飛騨圏域の高等学校の進路指導としては、自分の適性と進路がミスマッチをしないようにする支援と、生徒が決めた進路に向かって自己実現できる継続的・計画的支援が生き方を見出す支援につながるという特徴があった。飛騨圏域の高等学校において看護職を志向する高校生の地元愛を育む取り組みとしては、「総合的な探究（学習）の時間」を活用した地域医療の課題の調査や、近隣の病院などの出前講座などで実際に地域医療に貢献する看護職をロールモデルとして捉えられるという工夫があり、それらが結果として医

療職として地元に貢献できるという帰属意識を深めることに繋がっていた。

VIII. 謝辞

本調査について、インタビューに快く引き受けていただきました飛騨圏域の高等学校の先生方、インタビュー実施に際して関係機関との調整にご尽力いただきました飛騨高山大学連携センターの関係者の皆様に心より感謝申し上げます。今回の調査は令和 6 年度岐阜県私立大学地方創生推進事業「私らしく生きられるまち飛騨」の未来を担う看護師育成事業の助成を受けて実施したものであり、第 6 回飛騨高山学会（2024 年、岐阜県高山市）で発表した。

IX. 利益相反

本調査において、開示すべき利益相反関連事項はない。

参考文献・引用文献

1. 厚生労働省（2022）：令和 4 年版厚生労働白書，pp. 5-7.
2. 岐阜県（2016）：岐阜県地域医療構想，<https://www.pref.gifu.lg.jp/page/13850.html>（閲覧 2024. 1. 21）
3. 国立青少年教育振興機構（2023）：高校生の進路と職業意識に関する調査報告書—日本・米国・中国・韓国の比較—，p. 9.
4. 上地香杜（2019）：地方からの大学進学における日常的な進路指導—教室生徒の認識に着目して—，日本高校教育学会年報，26，pp. 72-81.
5. 高山市（2024a）：将来の進路や仕事に関する意識・希望アンケート調査結果，<https://www.city.takayama.lg.jp/shisei/1004958/1006854.html>（閲覧 2025. 2. 12）
6. 高山市（2024b）：令和 6 年度 飛騨メディカルハイスクール，<https://www.city.takayama.lg.jp/kurashi/1000016/1000092/1020076.html>（閲覧 2025. 2. 12）
7. 岐阜県（2016）：岐阜県地域医療構想_序章 地域医療構想の概要，<https://www.pref.gifu.lg.jp/uploaded/attachment/206699.pdf>（閲覧 2025. 2. 12）
8. 文部科学省（2011）：高等学校キャリア教育の手引き，https://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/_icsFiles/afieldfile/2011/11/04/1312817_07.pdf，pp. 39-44.（閲覧 2025. 2. 12）
9. 前掲 8，pp. 9-11.
10. 文部科学省（2018）：今、求められる力を高める総合的な探究の時間の展開，https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/sougou/20230531-mxt_kyouiku_soutantebiki03_2.pdf，pp. 10-15.（閲覧 2025. 2. 12）
11. 向田久美子（2018）：高校生にとってのロールモデルと将来像，日本心理学会大会発表論文集，p. 835.
12. 溝口佑 他（2022）：高校生のロールモデルとキャリア発達の関係についての縦断的検討，日本教育工学会論文誌，46，pp. 133-136.
13. 松原薫 他（2024）：飛騨高山で働くことに対する看護大学生への意識調査—高山市の企画による福祉・医療研修に参加した体験から—，地域創生 43，pp. 1-15.

14. 柳原真知子 他 (2022) : 高大連携ワーキンググループによる「学びの看護体験」の実践報告, 長岡崇徳大学研究紀要, 3, pp. 66-71.
15. 文部科学省 : 高等学校と大学との接続における一人一人の能力を伸ばすための連携(高大連携) の在り方について, https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/koutou/020-17/houkoku/06040408/001/004.htm#top (閲覧 2024. 2. 12)
16. 南本ゆみ 他(2020) : 看護基礎教育機関を退学した学生の退学に至る経験, 看護教育学研究, 29(1), pp. 11-24.